

グレートブリテン島と海を隔てて国境を分つアイルランド島南部のアイルランド共和国は、古くから独自の歴史と伝統を誇り、国民は自然豊かで安定した治安の下で穏やかに暮らしてきた。祖先がアングロ・サクソン人であるイギリス人とは異なり、アイルランド人の祖先はケルト人である。アイルランドは国民の90%がカトリック教徒で産児制限が禁じられていることもあり、レストランで食事をしているとカルガモ親子のような大家族がぞろぞろ入って来る。

冬季1月の平均気温が5.3℃、真夏の7月が15.6℃のように1年を通して寒暖の差が少ない。温暖な気候のせいもあり、牧歌的な環境に野外で唄うことが大好きな国民の間では、♪庭の千草♪や、♪ロンドンデリーの歌♪のような世界的に愛唱されているアイルランド民謡が広く唄い継がれ、それはアメリカのカントリー・ミュージックにも影響を与えてきた。長年イングランドの支配下にあった史実により公用語は英語となり、その他に伝統あるアイルランド語も公用語と認めている。

しかし、この第2公用語であるアイルランド語が思いのほか面倒で、複雑なスペルの地名や人名はすらっと読むことができず、

土地っ子でない外国人を悩ませるのは日常茶飯事である。そもそもアイルランド語のアルファベットは、英語のそれとは全く別物のようで、J、K、Q、V、W、X、Y、Zの8文字が欠落して18文字しかないこと自体極めて珍しい。

今から30年ほど前、旧文部省の教員海外視察団にお供してアイルランドのある都市を訪問したことがある。首都ダブリン郊外の人口2万5千人の小さな港町、'Dún Laoghaire'である。ダブリン空港に出迎えに来たバスのドライバーから初めてその正しい読み方を教えてもらうまで誰もその都市の正式な読み方を知らなかった。これは、「ダンレアラ」、または「ダンレアリー」と読む。

アイルランド語は外国人どころか、同じ国民同士でも特殊なファミリー・ネームなどは、簡単には読めない。小学校を訪問した時、難しいスペルの校長先生の名前を見て一体何と読むのか案内役の教育委員に尋ねたところ、自分にも分からないので、直接本人に尋ねて下さいとの返事には一瞬狐につままれたような気がしたものだ。

では、日本人にとって不本意にもJが欠けた'JAPAN'は、アイルランド語で一体どう表現するのだろうか。それこそまったく想像もつかない。ズバリ!'An tSeapáin'(アン・チャパーン)である。

(エッセイスト 近藤節夫)